



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第三卷

河出書房版

現代理本小說大系 第三卷

昭和二十七年十一月五日
初版印刷
昭和二十七年十一月十日
初版發行

定價 貳百參拾圓
地方賣價 貳百四拾圓

著者 幸田露伴

發行所 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出孝雄

編輯者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
中島健藏

印刷者 東京都青森市根ヶ布三八五番地
山田一雄

發行所

東京都千代田區株式會社
神田小川町三ノ八

河出書房

電話神田(25) 二三四七番
三一七四番

株式會社精興印刷

目次

幸田露伴

毒朱唇……………四

對髑髏……………一四

一口劍……………三

辻淨瑠璃……………四六

寢耳鐵砲……………七四

いさなとり……………二九

五重塔……………二四六

解説（中島健藏）……………二九五

幸田露伴

毒朱唇 對髑髏 一口劍
辻淨瑠璃 寢耳鐵砲
いさなとり 五重塔

毒朱唇

浮世をすねた山中のさる者

色氣なき大年増の戀ものがたり
聞いて給はれ雲どの岩殿水殿人間殿

上州に名高き三山の第一と呼ばれたる赤城の景色、殊更勝れた所は龍潭の不動様ある邊なり。十丈あまりの龍の音絶えず、溪川白く泡立ちて石を轉ばし流す勢はひ、都の人に見せたきは是ればかりならず、大通龍の命とやらんを崇めし巖の鐵鎖あらずば登り難き峻しき、御嶽鎮坐の岩も其如く、小通龍は尙恐しく、藤蔓に纏はれし趣き中と面白し。國定忠次が匿れ潛みしといふ洞穴の奥深きも物凄き一つなるに、斯る所を何と見てか溪川のほとりに何時の頃より移り住みけん、樵夫の妻にもあらぬ二十五六の女居りけり。小夜の寐覺に狼の聲を氣味悪くも思はぬか、扱も不思議と、折ふし不動へまゐる人の尋ね寄れば、何のく、氣味わるき者は都に

多しといふ。何とて山中に良い器量持ちながら暮さるゝと問へば、戀故との答へ。誰をと聞けば、釋迦さまを、と途轍ない挨拶して横を向き、白雲打ち眺め長く息を吹き、願はくば一斗の酒を得て有縁の山川草木禽獸蟲魚人間に我が戀の恍惚聞かせて呉れんと、獨り言したまふ眼付きりゝしく、鼻筋通りて色淺黒く、油の香なき髪くるくゝとまきて、ぢれつた結に束ね、大縮のどてら引かけたる風情、どうも云へぬ仇な所ありて然も異體なるには、取つて掛る戯れ男もなく、不氣味の女と言ひ難して其噂前橋の町に蔓衍れば、或る馴輕の男、少しの才學に誇りし者、それは面白し、我出逢ひて談り合ひ、若し氣に入らば引出して妻とせん、左様の女ならでは我が細君となすには足るまじ、兎も角も無益にしたからが一斗の損と、五升宛を馬の兩脇に付け、身も其に乗りて六里の道を苦勞とせず、晝頃行き着き、案内申すまでもなく忽ち爐の傍に座りて持せの酒を進め出せば、女苦笑ひして、小利口な男め、我を勵つて遊ぶ氣か片腹痛し、眞に我が戀の由來聞きたくば中途に逃るな、何にせよ是は御馳走かたじけなしと、飲むわ、飲むわ、飲んで亂れず膝崩れざりしが、一時ばかりに一斗滴水も残さぬ手際、流石の男驚きけるをじろりと睨みて、ほゝと笑ひしより頬の色美しくなりまさり、臉に紅さして來りける。

男此體を見すまし、御前様戀の仔細、世に珍らしくお釋迦

様を相手になさるは何故か少し伺ひたし、と詰寄るを打消し、はて無粋なお方や、世の中に心の美くしう洒落れたは歌人と極つてある事、歌人に惚れぬ女は人形喰ひとて是雌犬同様、我は自然と佛一代の御所行聞きおぼえて、扱も世界の大歌人、天晴美しい方様、たのもししい男、粹なお人、實のあるお方、今若しござらば少し甘えても見たく、可愛がられても見たい殿御と思ひそめたが無理でござんすか、といふ。やれ／＼變なおのりけ少しも分らず、釋迦といふは大の嘘つき、小説の苗賣り、其を買つて收穫をした利口者が貫中馬琴をはじめ、唐土日本の昔の小説家とは思ふて居ますに、我等友達の洋服男は大「ふキろそふあア」でげすの、珠數かけた男はありがたい宗教家でござるの、如意ひねくる男は打ち殺して仲にやらうのと銘々勝手の云ひ草、おまへ様のやうに佛は大歌人など云はれたら、馬鹿も年數の功を積んで妄想を捏着けた痔持の坐禪家や、不立文字と唱へながら不立公案と氣が注かぬ似非居士輩が怒らうも知ず、無門關一冊位を大事に秘藏して乙にねぢれた言葉を放つ儂輩は、芥子よりちひさい眼で、達磨の眼睛すべて會せず、尋常呼びなす一聯の詩など撒散した中蜂の法螺をさがし出して得意顔に威張るでござらうが、夫等はどうせ碗中に濁酒を満して醍醐を容れぬ阿呆、未來永々到底あやまちを改むる事のできぬ者なれば、おまへ様の戀の譯もわからぬはあたりまへながら、舟を虚しうして以

て人を待たうとして居る拙者にしても只今だけでは何やらわからず、最う少し濃やかに、と尋ねれば、御道理々々、能くまあ今迄あなたが右に挟んで居らつしやる昔しよりのつまらぬ坊主や、又は赤鬚連が己が田へ引く水縣口説をさらりツと投捨て御聞きなされ、祕事は睫毛とやら眞實のおもしろ味は茶をのみ飯を食ふ間にも行なはれてあれば直に分ります、さあ此處でござんす、恥を捨て妾しの心意氣を無暗と饒舌りませうに笑ふて下さるな、中途で寐たりなぞなさると天窓から反吐はきかけますぞ、扱お釋迦様といふ可愛い殿御は、あなたも御存知の通り天竺の國王の息子、日本の高天が原長屋に住む連中の噂では、大名主位の者の總領の甚六だとの悪口、なんの詰らぬ穿鑿、商人あがりでもまほめツとは豪傑、厩の中で生聲あげられたとて神の子なら殊の臭みが移つても居まい、よしや我折れ其親は大名主であらうが牢名主であらうが、其の子は生れついでに氣象おもしろく、「まくり」も能う飲んだやら胎毒も少なく清くしく生長た様子にて、乳の呑み過しから脳病も起きなかつたさうなれば、自然と出来のよい人間竝に智慧も日に増し發けて來たであらうと思はれますに、やれ三年三月と何日何時胎内に居られたの、横つ腹を蹴破つて躍り出したのと埒もない冗談、それで様の下に飛び込めば血塊の妖物、評判ミミ木戸銭は見ての御戻り、おほは是はまあ輕機な、私とした事が圖に乘て横道へはいりまし

た、それから段々大きうなられて、人間は死ぬ者だと云ふ事を初めて心注がれた時、さりとは果敢ない者ぢや、死んで花實が咲くものかと小聲で唸りもなされず、あゝ死んで行く人のお膝の上に抱かれた事もあつた御父さんやお母さんに別れ、馴れなじんだ女房、可愛い子にも別れ、一つ酒盞で獻酬して睦ましく語らひ合ふ友達にも別れ、畜生の心にも我を戀しと思へばこそ出這入毎に尻尾をふつて、ふん／＼と鼻を擦りつける可愛らしいあの黒斑にも別れ、半分は我が代理をして下女の睡りを毎朝起したあの鸚鵡にも別れ、折角苦勞して拵へた家藏、丹誠した庭池、萬年青の鉢植、根上り松にも別れ、我が足音を知つて浮み出る緋鯉龜の子にも別れ、着卸したばかりの好みの衣袋にも別れ、蠶蚊に一寸さゝれてもそれ寶丹、小石に躓つて擦り疵出來たにもそれ即効紙と騒ぐ程大切にしたる自分の、親より子より女房より内々は最惜しう思ふて居た自分の身體にさへ別れて、仇し野の空に飛び上るか黄泉の流れに浮き沈むか知れぬ眞黒の中に行きとも無いながら行かねばならぬ悲しさ、今朝結ぶた計りの天神髷、鞠について遊ぶにも散けるを厭ひける美し盛りの小娘が其髪のはらりとなるにも構はず、がつくりと泣き伏して切々と動氣烈しく、父様のいのうと冷えかゝる左の手につかまりて呼ぶに、いとしの者や汝を置いて父は何處へ行かれうかと思ひ迷ひ、あいと一言返辭して安堵さしてやりたけれども、舌の強りて

意にまかせぬつらさ、長の年月連添ふて一厘の隔なく契り交し、私は龜吉お前はお鶴、共に千代まで八千代まで、替らぬ離れぬ、地雷火が今起つても噴火山が二人の膝の間に燃え出しても、退かぬは退かぬは、神文くつされと惚れ合つた女房は、惣身の肉めき／＼と剝るゝまで慄へながら我が胸をゆすぶり／＼、取りみだして節糸の小袖ばりゝと口に噛み裂き、妾を置きざりにして何處へ去れるとの恨み、あゝ可愛い貞節者、おのれその顔を見納めにと眼は力一杯に開いても見えぬ切なさ、御隠居様は平常痰持の咽苦しげに、ぜり／＼した聲を御惜しみなく精限りに、息子やツと耳につき給ひて、惣髪の白髪を我が枕邊に浪立たせられ、情無や世盛りの男を、ほッ／＼、何たる逆ま事ぞ、ほッ、年老いし我は死なで、えゝ阿彌陀さま、我を息子の代りに引取つて下さらば死別れも却つて嬉しからうものを、ほッ／＼、代つて死たい、ごほんごほんとかゝ入られながら、先立つ不孝の者の面に澆がせ給ふ熱鐵の一涙、あり難さ満身に鑽りもみする様に浸み透り、あゝ今まで何十年お世話焼かせた計りに孝行らしい事は肩一つ揉んであげるだけの業もせず、剩さへいつぞや吾が子を叱り給ひしを見たる時は、口には出さざりしなれど此老耄の死損ひめと、勿體なくも腹立ちし程の此く不孝者にも御いつくしみ深く、御老體の殘年榮養なされて幾程ぞ、それを尙も短くなされて我に代らんとの喻へ難き廣大の御慈悲、今爰に不

孝の廉とありたけ櫻み出して懺悔なし、許すぞと御一言きいて安く終りたけれど、叱、後れたり、せめては御手をばかりもいたゞいて彼世に行きたきに、無念、それも叶はず、三歳になる男の子、おのれは父に似て呉れるな、あッ、おのれは不孝でないか、あッ、父の死ぬにやさしくも泣いて呉れるか、あゝ罪もない者に悲しみを知らする悲しさ、ヒィッといふ高啼の聲ばかり聞えて居ながら、次第々々薄霧の立籠る様に、舟に乗つて岸を遠ざかる様に朦朧寂寞となり終りて、後はごうッと鳴る大木の梢吹く風の餘りに率塔婆を吊らひ、枯れ枯れに泣く蟲の音が變化の少ない音楽を耳のない石塔の前に奏るばかり、是ぞ人間のとゞのつまり、王侯將相士農工商、遊女も哲學者も穢多も婆羅門も、御氣の毒ながらあなたでも妾でも同じ事なれば、其處でお釋迦も子供らしい觀念ではあつたらうが、ぞつとなされて發心なされたと云ふ話し、然し晶眞の引倒し連中の申す様な、此發心がなんのかんと申す譯ではなく、妾が了見では高が物の哀れを知られた分の事、理屈も講釋も有つた者ではなし、もしく寐てはいけませぬ寐ると打ちますぞ、されば學問は齡と共に進み浮世の有様も次第々々に能く分つては來れど、穢さい時強く感じた事は中忘れぬ者、いや死ぬまでも忘れられぬ者なれば、兎も角もお釋迦様ほどの豪傑が烈しく確かりと腦漿の底に印された事、一朝一夕に消え去るべき筈なければ、却つて學問經驗の

増すに従ふて其感情の深く大きくなりまさるは當然の事、昔しから物語にある男女が一度思ひ染めては、一人の外に三千世界の男も女もない様に思ふて、華奢な姿、意氣な粹の他にあらぬではなけれど、眼につく者皆最初に惚れた人に焦るゝ種となるばかりなると丁度同じ道理、されば彼方の島田番にも迷ひ、此方の達磨返しにも迷ふ様では戀も凡人、さもしき境界ぞかし、お釋迦様とて春心つく頃、仇な音締の琵琶に天竺の二上り、「まかからきん」の「あはだらやあべんびん」とか何とか、おほゝ、まさかそんな歌もありますまいが洒落た文句で浮かしたてられ、舞ふや乙女の雪の袖、緋縮緬の蹴出しびらりぱツとした遊興酒宴なんどに、見事々々とお聲かけさせらるゝ様に浮世まざれし給ひては、假令聰明でも、詰り隣りの國に打入り、結構な姫達を分捕致されて閨の塵を拂はさする位の汚き業で八十年を終られたらんに、流石は鳳凰群鶏と食を爭はず、一途に高尚の想像に耽り玉ひ、色作りて磨き立て、御意に叶はんと苦勞せらるゝ御后妃憎うはおぼしめさねど、あはれや是も臨終の今夜來るも知られぬ顔に可惜眉刷毛の幾撥ぞと、あはれみ給ふ心御胸の中に絶えねば、閨の陸言もとんちんかんで合縫うまく合はず、愛惜の大小に一身の周圍を照らす一時の提灯と、天下の萬年を照らすお月様とほどの差別あれば、耶輸陀羅御前はもどかしく、これ太子様、ちツとは打解けてお話しなされてもよさそうな者を、いつ

もいつも物案じのお顔付何故でござんすと御尋ねになれば、イヤ別に打解けぬ譯はなけれど、いとしそなたの死ぬ時はどんなにあらうと、其美しい顔見るたびにあはれを催してならぬとの仰せ、あれいやな事仰しやらずとも妾をいとしと覺しめして下さるならば、呀々として面白うお話しなされて下さりませと云つても素氣無い御挨拶、左程おもしろい話でもないと木で鼻縛る御答へなり、あゝ意地悪な、あれ御覽なされ蟲が燈火を取りに参りましたが、蟲は火故に憂き身を焦す、私は君故焦れ候ふといふ古い唄は、丁度私を詠んだやうの者でござんす、あの蟲あはれと思しめさぬかとしたれかかれど、ふむうと氣のない返辭ばかり、折ふし燈火はぼつたりと蟲に消されて眞の闇になれば、兩手をぼんとはたき給ひて、今の燈火は頓死かななどといふ風の調子なれば、父母親類の間も此通り互の思はく違ひけるが、遂に此豪傑奮發して、海燕辭し去る珊瑚の枝、それより幾年の修業、毎日こ泣きツ面の揚句、佛頂面になりすまして四十年の説法、其人のととの詰りは扱どうちやと考へて見れば、意地汚なの菌の中毒、跋提河でのたれ死、矢張り泣きツ面の佛頂面をして終りを御取りなされましたが、此處が私の惚れた所、どうやら恥づかしいやうな、女子だてらにお饒舌ちやとさげすんで下さるな、妾の思はくでとお釋迦様を大歌人ぢやと申す譯は斯うでござんす、お釋迦様は元來初一念が、悲しいといふ事、果

敢ないといふ事、情ないといふ事について動いた者故、其後は始終悲しい果敢ない情ないといふ方から大千世界をお覗きなされ、お覗きなされるればお覗きなされる程、尙々悲しく果敢なく情なう思し召すより、人の氣のつきもせず知りもせぬ悲しさ果敢なさ情なさまで探し出され、黒塗の馬車靜々と毛色艶やかな駒に牽かせ、春の彌生に櫻狩りするそんな所その姫君が、花に風輕く來て吹け酒の泡と秀句いふて木の下に停り給ふを見ても、やアびいどろが櫻につるさがつて居るはと駄評する男とは違ひ、やれ／＼美人は花に風を恨みてあの和しい心を傷めて居れど、風は遠慮なく花は時に應じて頓てほろりほろりと落散るであらうものを、自分の色香も其通りと氣が注いで居る笑止さ、又其一類眷屬は此姫を花と見て無事なれと思ふて居るだらうが、無常の風が長うは許さず、翠の黒髪柳清香の井筒油のとお洒落ありたけ仕て居る今こそ不動の縛繩より強く、摩利支天の甄出すをも止むれど、末は蓬が下の塵、山犬も此白髮昆布には閉口と食ひ残すなるべく、青蓮の卷葉見た様な細眼うるはしく、じろりと一度情を送られては英雄も三年の熱病に苦しめらるれど、後は一類の爛葡萄、嘴太鳥が用赦なく抉り出して舌打ちするなるべし、泥に塗れ馬蹄に踏まるゝ花薔はまだしもの事ぞかしと、大息ついて泣かるゝ質故、どうか此花の散るに恨みのない様美人を慰めてやりたく、美人の死ぬにも親族當人を平和にさせてやりたく、

滿天下の男女をも自分をも福徳圓滿の境界に安坐させたく、其時分の學者の門を叩きてまはられたが、さりとては諸らぬ加持祈禱、めくら信心、へぼ理窟の外には何もなく、浮世の諸分の話せる粹めもなければ、獨り相手のない山中に物思はしく寂然と、早乙女が戀に沈んだ格の鹽梅に、眼の前に朦朧ちら／＼と立つ者を捕へて口舌でもやられたり、ぢれツたいと空を打つたり、いッそ死にたいとめ／＼泣いたり、今度逢つたら突然飛付いてあの御手を腮の下にかい込んで、斯うすねて斯う口舌を仕ようか、おや／＼斯う云はれたらどうしよう、何もなにとツきりしたり、色々妄想の大長刀を縦横十文字田字巴に振り廻されしが、愈々思ひ切つて出たる曉「みるく」屋の配達に一合の乞食の味を覺えられたるこそ可笑くも有りがたけれ、即ち説出されし長歌短歌、之を一切の經と名付けて無暗とありがたくせしは、後世の大痴漢どもの取計らひ、悲しや釋迦様が天下の木男岩女のあはれを知らぬ人達に、戀ひ焦れて泣きながら口説るゝ濡の文句の根本あはれ深きを、天下の男女親父様の異見の様に聞きなすより、蕩業者は何云はしやと鼻であしらひ、正直娘はへいへいと頭を無理に下げ、發明息子はそれを肩に被て外の兄弟をいぢめ、伶俐な女は敬して遠ざけ、學問の積んできた男は一鎗突込み、あはれ／＼世界に類なき人情の深い深切極まつた胸中より流れ出たる、ほんにやさしのお言葉を嚙ばどん

なに甘味もあらうを、千鍊萬銀一條の鐵理窟と見なし、それでは此處が行けぬ彼處が分らぬと、精神の外は文字も形容も假物の詩歌なるを知らいで、詠み捨ての反故を相手に、寒蟬に跨がつて落月を追ふ穿鑿、白痴と云はうか阿呆と云はうか、群盲が象を摸したとは違ひて何れも様方御聰明ぢやとて、黒闇の穴の中で黒豆を見分ける事は、おほ／＼笑止や、それはまだしも口惜いはひいきの引倒し、完全な宗教者ぢや高尚の哲學者ぢやなぞと、燈心蜻蛉の見え透つた羽根を怒らして、蓮の花を東西に動かしたがつて居る様なが片腹痛い、威程念佛宗題目宗眞言宗なぞと色々のお宗旨、今となつては宗教かも知れぬがお釋迦様は何宗、おほ／＼、自分の宗旨を自分で造りて自分で信仰するならば、丹次郎はのろけ宗、由井の正雪は謀叛宗、勘平が鐵砲宗、團十郎が濫い宗とは、聞いてあきれが蜻蛉返りする話し、殊更今年の智慧道德の上から拾らへた者に甘んじて來年の智慧道德は進歩せぬ事受合ひ、是で澤山だと極めて居る様な馬鹿さ、四歳になつて三歳と同じ衣服が著られるか、さて／＼をかし、よしや自分で改正増補、去年の者を、今年は引延し、來年も引延し、智慧經驗が積むに従ひ延して行くなら都合はよけれど、護謨の尺度、さりとては當にならぬ頂上ぞかし、お釋迦様が又宗教製造人で遠見に極樂佛界の高殿樓閣、金紙銀紙の張子細工、木戸の外には地獄の血の池赤いんき」を湛へ、針の山に五寸釘を

植ゑ、舌をねぢる「べんち」、胛中をどやす摺小木を備へ、いらつしやいゝ極樂行きの通券は貪瞋痴三錢を捨てるゝ代りに上げますぞ、五戒の五錢、十戒の十錢、段々と違ひます、上根の方は六度萬行、それ相應の價打ある報は必ずござると、黄色の肌ぬぎになつて大汗かき呼立つる、阿彌陀殿は横の方の小門で、安い者ぢやゝ、此方は念佛錢たゞの一文ぢや、大負に負けてやるぞとわめき立つるならば、其景氣素敵滅法におもしろく、其丈で大入は受合ひなるに、要りもせぬ向ふ側に大乘館をたて、威儀堂々と演説仔細らしく、縮れ毛の中より電氣燈の簀なんぞ耀かせながら、牛頭馬頭實に其形なし、彼方の趣向は斯うでござると、光學の説明から初めて首切り手品の種をあらはす様な辯舌を振はれたのは、餘程半間の話しではありませぬか、寐ると打ちますよ、哲學家といふものは妾しの考へではお釋迦様とは玉と金ほどの違ひ、方便だの神通だの使はれては醫へば眞の哲學者にしても半文錢の價値ない一生の御議論、南京豆の袋となつて果てるがあたりまへらしく思はれまするに、偽作らしい三四部の御經をつかまへて、全體の御所業四十年間數々の歌は捨置き、高の知れた「おべらぐらす」で慧星の尾を見た様な詮議、それを堅く執着して此處「ごうたま」の眞面目なんぞと思ふより、唯物論には打込れ有神論にもつつつかれ、「ぜおろじい」の一冊も讀んだ小供には、佛者の天地創成記毘藍風が吹いた

とか地に餅の皮が有つたとか、又は馬鹿らしい時間と空間と靈と肉とを一鍋にたゞき込んだ見珍料理の須彌山説、耳が痒うて皆まで聞かれぬと冤罪まで負はされて嘲られ、譯の分つた人には白眼で一寸睨まれる位の事、成程御一代の歌は哲學の參考位にはなるか知らねど、浮世の男女に大熱くのお釋迦様が冷々淡々唯眞理を味はふ哲學者なら、阿含の子守歌歌ふて居るべきにあらず、畢竟大乘非佛説勝を得たらば不完全な宗教製造屋とは云はるゝか知らねど、哲學者とは思ひもよらず、魚屋に「もゝんぢい」の注文なるべし、されば宗教家でも哲學者でもなし、宗教家哲學者としてはあり難からずと妾は思へど、妾の戀ひ焦るゝは全く歌人ぢやと思ふからの事、是も礎に眞眞の引き倒しぞとは知れど、迷ひ込んで中驚の山道暗く、教へ指さす人もなき、天下に妾一人の果敢なき戀に彷徨ひて、右も左も語るべき友ならず前も後ろも皆胸合はぬ中なれば、露の助けもなく、煩惱に面白からぬ月日を送り越し、無明の夢の長き夜は恥かしながら方様のお姿まざゝと拜み奉つて後、いやます思ひにいつか氣も亂れ髪もくしけづらず、唯と紀念の御歌數々を繰り返し讀み耽り、繰り返しては忍び泣くばかり、遂に親類一家の者に狂女と云ひ做され、追ひ出されてかゝる深山に逃來り、拙き五慾の塵をさけ争ひを捨て安らかに住めば、嬉しや片戀も感應ありて語り得ぬ面白さへあるぞかし、抑、佛は愛執を斷じ

て、初めは乾慧地より段々と枯木の如く石の如く、無始劫來の情想因縁總べてほどけて、結局は八面玲瓏涅槃の境に入り給ふと、晴の上に魚鱗を掛けたる古今の幾人、當推量に人間らしくない者に取りなし、西施に向つて無鹽をほめる見當ちがひの批評取沙汰、其根本を究むるに第一情理の誤りなり、釋迦一代の御唱歌の文句に泥み宗義に縛られ、三世成程斯うした譯、四大成程斯うした理由、十二因縁斯うした理窟、斷常二見は是故いけぬと、白痴が禪で解く芭蕉集の講釋聞く様に、一葉と理窟で斬りさいなんので注解付けて行く故に、一篇の精神どういふ形になつて露はれて居る事やら、どういふ的にそゝいで居るやら分らぬも道理、障子の紙に頭をぶつけてはぶん／＼云ふてる虹が百年たつても頭を突き抜く事の出來ぬ筈、此和郎達が何千萬人、銘々自分の取り付いた故紙の上に摺付木の箱程な理窟の四疊半を建て、窮屈なにぢり口を明け物數奇な男を引き込み、三文にもならぬ香合を褒める事から稽古をさせ、枝炭の配り様、副紗のさばき様、乙にむづかしく教へ込み、洗ひ米を茶請にしたと云ふ元祖の風流は三千里外に忘れ飛ばして、菓子ば春なら羊羹、口切なら蕎麥饅頭の熱いのに限りと、さりとては面倒な話し、一切茶杓の定規で推す故、つまりは釋迦様を理窟屋の大將と見なしたるこそ片腹痛けれ、それをまた其理窟に打てかゝるは一度は蠅をなぐりし韓退之同様、後世の其角程な暫間坊主にも笑はれ

るであらうと笑止千萬なり、元來瞿曇様は人情の火の手滿身に燃えほこつて、權助をおさんをも最惜い可愛い子の様に思はれた御方、中々後世の狸和尚、山の芋居士の様なおんきな者ではなし、冷かな理窟じみた歌を垢の多い耳の孔に入れたとて、何の冷たい理窟屋であらうぞ、はてまア、「びつとる」を兒に飲ます母の心が苦いか甘いか問はでも知るること、目前の小さな愛を忍んで後々丈夫になれとの尊く深い愛ぢやに、見透しの付ぬ男ども目前の愛を忍ぶ所だけ見けて大きな愛の匿れて居るに氣が付ぬ白痴、一代の御詠歌冷うて苦いばかりを見て、お釋迦様とは能膽の凍つた者の如く考へ其眞似をしても、自分には大きな愛情がないに何で小さな愛情を忍び得べき、されば佛一代色々のへぼ理窟を捻られたが、御自分は少しも其理窟に拘泥頓着なされぬは、愈々溢る程大きな愛情の熱涙を湛へて居られたに相違ない、其で無ばざつと一萬五六千日、東西南北に駈巡りて恐しき日に焼かるゝも構はで、御舍利の汗をばた／＼と流し、廣長舌の糜爛する程息巻いて小兒には小兒、大人には大人、牛飼にまで相應な者を賣り付けらるゝ小面倒が出来る者に非ず、若又一代自分の熱情を本に働いたではなく矢張り冷い理窟捻りのゑせ賢人か偏人ならば、小判ぢやと木の葉で小兒を賺すには當らず、九十六種の外道の頭はかりを捕へて、非想非想の酢の菰蕒のと蚯蚓の組打見た様な眞似をせられて居られそ

な者、且又五時八教、おほく、猫の眼流の極が付ぬ事をいふた揚句、一字不説ちや自己は知ぬ、三年前の鳥の所爲だと埒もない事云はずに、眞の理窟ならこつつりと萬年變ぬ黄金作りを投出さるべきに、斷常二見を兩方破して幾何學上の線の上に自分は立つて何方にも墮ちぬ様な顔なさるゝが、等分の境界を過ぎ、片足づゝ兩方へ踏み込んで居るでなければ、線には幅なし、立つ瀬がござらぬ、そんな曖昧をやつて、佛は十四の難問に答へずと大智度論に斷らせる様な事をして置くにも及ぶまい、さアして見ればどうしても理窟ばかりを眼中に存して、肉慾を始め小さな愛を捨てた野暮ではなく、大きな人情を胸に湛へて居て、機に臨み時に應じ、鞠歌も謠へば粉挽歌も謠ふた大歌人、前後始終文句が變り調子が變つたも不審ではなし、兎を鑄ても鳳凰を鑄ても皆是れ箇々銀光を放つ、妾の胸の爐に情の火で焙かして見れば般若と阿彌陀と鉢合せもせず、とろ／＼の／＼となつて醍醐の味がする大人情、そもや其人戀しく思はずに居られませうか、斯う申したら妾は理の圈中に落ちぬ代り情の圈中に落ちた、佛法を情解の眼鏡で覗くか馬鹿なと仰せらるゝか知らぬが、佛法などうが私に食ふても鼠が引きても、公認とならうが荒神と唱へや重するなら、釋迦の捻つた花を打落し迦葉の笑つた横ッ面を蹴飛ばし、達磨の袈裟を雜巾にして、佛祖的とぼち／＼の以

心傳心、そんな者は玉屋の符牒を洒落本で讀む様に心得たが良いらしい事、又何某禪師より印可證明、おほく、眞理會得の免狀を人間から貰ふたとてつまるまいに、眞理を搜すならそんな者は捨て燃燈佛以前彌勒佛以後に佛法をさがして貰ひたいが、いや／＼それより蓮の葉に小便すれば御舍利が出来る、當體即佛の自分を尋ねたが良い、いや／＼佛法といふ側より眞理といふ側から尋ねた方が、どうせ五十年の草臥まうけであらうがまだしも男らしい、妾はむづかしい事は蟲が嫌ひ、唯々可愛い殿御の御心根に惚れた計り、普通觀念から佛といふ者の定義を立てたらどんな者か、夫等は後世の四疊半仲間の御相談に任せてとんと關ひませぬが、何せよ氣の毒なは妾の戀人を、誤ふものは神かと恐れ、嫌ふ者は惡人の様云ひ做し、世界には類少き粹様を取つて押へて野暮の本尊とする輩の多いには悔しうて涙が蹺れます、初めにも申した通り、初一念が人情の激動、高尚の感情が浮んだが源で、一生想像を歌つた方様、最後まで始終浮世の半面を歌ひ暮らされ、殊更遺教經なんど一句一句理窟でやかましう云ふたら良いか悪いかわからぬが、其時の御齡御有様をじり／＼と考へ、尙能く親切に諄々と熱情を漲らせた御言葉、然も花の香のせぬではない其御餘裕が有て其御愛憐の切なるお心の中汲で見れば、慥としてありがた涙が溢れやうではありませんか、あゝ長々と饒舌草臥れました、と云へば、男は先程よりの長談義

に聞き飽て何時しか駢の音を立てたり。
 女はこれに柳眉を逆立て星眼を活と見ひらき、此情なし男
 めと大喝一聲して、男の腦天へ反吐を濺ぎかくる事瀧の如
 し。一斗の酒我に歸て男は急に逃出けるが、其後女も行へし
 れず、猿の聲ばかり木の間にありく。

(明治二十三年一月)

對 觸 體

旅に道連の味は知らねど

(一) 世は情ある女の事く

但しどこやらに怖い所あり難い所

我元來洒落といふ事を知らず、又數奇と唱ふる者にもあらで、唯ふら／＼と五尺の穀を負ふ蝸牛の浮れ心止み難く東西南北に這ひまはりて、覺束なき角頭の眼に力の及ぶだけの世を見たく、いざさらば當世江口の君の宿假さず、宇治の華族様香煎湯一杯を惜み玉ふとも關はじよ、里遠しいざ露と寐ん草まくらとは一歳陸奥の獨り旅、夜更て野末に疲れたる時の吟、それより吾が身を露の友として頼て脆くも下枝を落なば、摺附木となりて成佛する大木の蔭小暗き近邊に、何の功をも爲さざる苔の碧みを添へん丈の願ひにて、囁語にばかりは滴水とく／＼試みに浮世そゝがばやと果敢なき僧上、是れ無分別なる妄想の置所、我から呆るゝ程定まらぬ魂魄宙宇に

彷徨し三十年來、自ら笑ふ一生定力なく、行藏多くは業風に吹ると、故人の遺されし金句に、歳の市立つ冬の半夜、蝙蝠騒ぐ夏の夕暮などは、臍を冷し骨を焚く感じを起す事もありしが、三日坊主の一時精進、後はゆつたりのつたりにて、丁度明治二十二年四月の頃は、中禪寺の奥、白根が嶽の下、湯の湖のほとりの客舎に五日并べの修業を兼て病痾を蓋ひ居たりしに、有難き温泉の効能、忽ち平癒するや否、丈夫素より存す衝天の氣なぞといきり出して、元來し道を歸るを嫌ひ、御亭主是から先へ行く道は無いかと問へば、どうも此處は行留りの山の中、見らるゝ通り前は前白根奥白根雲の上に頭を出して居る始末、登山は夏さへ六かし、其續きの横手の方は魂精峠と俗に呼ぶ木叢峠、此頂上は上野下野兩國の境界、山山折り果なりて、當方より越る六里の間に暖湯飲むべき家もなし、殊更時候大分違ひて大澤徳次良あたりは、野州の名花八沙の眞盛りなれど、此近邊はそれもまだ咲かず、況して峠は一面の雪、五尺六尺谷間には積り居りて道も碌には知れず、今年になつてから越した人は指の數に足らぬ位、とても遊び半分なぞに行かるべき地にあらず、御客様是非もなし、中禪寺までお戻りあつて足尾とか庚申山とか里近き孫山でも見物致されよとの言葉。

おのれ我を都會育ちの柔弱者と侮つたりや、其義ならば旋毛曲りの根性、天の邪鬼の意氣地見せつけ呉れんと詰らぬ事